

「クリシェな探偵」

— 2 稿 —

2026/08/01

山極 瞭一朗

人物表

栗栖 くりす	ルシエル	(32)	探偵
玉木 たまき	環 たまき	(26)	刑事
堂本警部 どうもとけいぶ		(54)	刑事

男1・2
女1・2
鑑識課員

1. 崖（昼）

激しい風が吹きつける。
荒れる波。

10人ほどの老若男女が集められている。その中に、
堂本警部（54）、仁王立ちで腕を組み、静観。

すると、こげ茶のマントにハットといういかにも探偵然とした探偵の栗栖ルシエル（32）がやってくる。火のついていないパイプを口に咥えている。

栗栖 「皆さん、お揃いですね」

堂本 「待ってましたよ、栗栖探偵」

栗栖 「探偵は遅れてやってくる」

堂本、ひとつ大きく頷く。

男1 「探偵さん、うちらの中にいつを殺したやつがいるって
いうのかい？」

栗栖 「いなかったら呼びませんよ」

女1 「わざわざ関係ない私たちを呼ぶ必要あるのかしら？」

栗栖 「お決まりというやつです」

男1 「誰もあいつを恨ん——」

栗栖、手で制し、

栗栖 「極めて難しい事件でした」

男2 「さっきと言ってくれよ。一体誰が殺したんだ」

栗栖、ムツとして男2をチラ見、

栗栖 「仕方ありません、結論から申し上げます」

大袈裟にひとつ咳払いをして、

栗栖 「犯人はあなただ」

と、男2にピンと伸びた人差し指を向ける。

× × ×

男2がパトカーに連行される。

見送る栗栖は得意げな顔。パイプを咥える。

他の人々は三々五々散る。

2. 高速道路（夕）

渋滞中。1台の覆面パトカーがいる。

3. 車中（タ）

ハンドルを握る堂本。

後部座席の栗栖はじつと外の景色を眺めている。

堂本 「いやあ、今回もお手柄でしたな」

栗栖 「当然というやつです」

堂本 「それはそうと、次回からうちの新人をつけることにしました」

栗栖 「堂本警部が僕の専属では？」

堂本 「優秀な新人なんだ。仲良くしてくれたまえ」

栗栖 「答えになってません」

堂本、ガハハと笑って運転に注力。

栗栖、不安げにため息をつく。

4. マンション近くの道（昼）

目の前には中層階建てのマンション。

周囲には規制線が張られ、野次馬たちの群れ。

若手刑事の玉木環（26）、いかにもやる気満々な様子で、野次馬をかき分け、規制線のふちまでやって来る。

そのままくぐろうとするが、警察官に止められて、

環 「あ、そうですね。持ってるんです。ちよっと待ってください」

警察手帳を出そうと、懷に手を入れる。

すると探偵然とした男が環の横をすり抜け、規制線をくぐる。

環 「え、ちよ……」

環、警察手帳を見せ、規制線をくぐる。

そして男の腕を掴み、

環 「ここ、関係者以外立ち入り禁止ですよ」
男はパイプを咥えた栗栖である。

栗栖 「はい？」

環 「はい？ じゃなくて、警察官じゃないですよね？」

栗栖 「人に身分を訊くなら、最初にあなたが明かすべきでは？」
環 「は？」

栗栖 「ま、知ってますけど。玉木環刑事」

環 「なんで私のこと……」

マンションから堂本が出てくる。

堂本 「栗栖探偵、お待ちしておりました」

環 「探偵？」

堂本 「おう、環。なんだ、もう挨拶は済んだのか」

栗栖 「堂本警部、まさかこの娘が？」

堂本 「その通り、今日から君の専属だ」

環、わけがわからないといった様子で、

環 「……あの、何ですか、その話」

堂本、ガハハと笑う。

5. マンション・一室・リビング（昼）

散乱した室内。

胸を刺されて死んでいる中年男。

堂本と環は遺体に合掌している。

別の部屋から来た栗栖は一目散に窓の方へ向かい、

鍵をカチャカチャと触る。

堂本 「栗栖探偵、何か気になることが？」

栗栖、堂本をチラッと見て、薄く微笑むのみ。

環、堂本に小声で、

環 「あの、何なんですか、あの人」

堂本 「探偵だよ」

環 「それはさっき聞きました。どうしてここに——」

栗栖、指をパチンと鳴らす。

一同が栗栖に注目。

栗栖はしゃがんで遺体に合掌。終わると、立ち上が

る。一同を見渡して、

栗栖 「これは、実に興味深い事件です」

環、ポツリと、

環 「無駄が多いな」

堂本 「何かわかったのか？」

栗栖 「いえ、まだ何も」

6. マンション・一室・玄関（昼）

環、切断されたチェーンを栗栖と堂本に見せる。

環 「駆け付けた警察官によって切断されました」

栗栖 「通報者は？」

堂本、環を一瞥。

環 「隣人です。男性の叫ぶ声が聞こえた」と

栗栖 「被害者だね。男が叫ぶってなんだかイメージつかないな」

環、愛想笑い。

環 「……あの、続けていいですか」

栗栖、パイプを咥える。

環 「チェーンが掛かっていた以上、玄関から侵入することは

不可能です」

堂本 「玄関から侵入したとは限らないだろ」

環 「室内のすべての窓には内側から鍵がかけられており、侵入は不可能です」

栗栖 「秘密の出入り口とか？」

環 「ありませんでした。ちなみに、窓の鍵を細工した形跡もないようです」

堂本 「つまり、あれか」

栗栖、ニヤリと笑う。

環 「はい、現場は——」

栗栖、環のセリフを奪い、

栗栖 「密室だったんです」

7. 車中（昼）

ハンドルを握る栗栖、どこか嫌そうで、

栗栖 「なんで僕が運転なんだよ……」

助手席の環は申し訳なさそうに、

環 「免許持ってなくて」

栗栖 「堂本警部も運転できる人を助手につけてくれりやいいのに……」

環 「あ、助手になった覚えはないです」

栗栖 「はい？」

環 「私刑事なんで、探偵ではないです」

栗栖 「マウント取ってくるタイプ？」

環 「普通に事実です」

前方、赤信号。車は停止する。

環 「訊いていいです？」

栗栖 「探偵に質問とは——」

環、遮って、

環 「タイパ悪いとか思いませんか？」

栗栖、ひとつもピンと来ていない様子で、

栗栖 「タコパ？」

環、冷めた口調で、

環 「ツツコミ待ちですか？」

栗栖 「なんで？」

環 「一挙手一投足、仰々しすぎるといいうか。意味ありますか？」

栗栖 「意味とかじゃなくて」

環 「え、じゃあなんですか」

栗栖 「普通にやったら探偵ぽくないじゃん」

環 「ぼさいます？」

栗栖、身を乗り出して、

栗栖 「愚問だよ、それ」

環 「はあ……」

栗栖 「淡々としての探偵なんて、それもう探偵じゃないから。

タコなしでたこ焼きって言ってるようなもんだから。もはやたこ焼きじゃない」

環 「たこ焼き粉使ってる時点でぼさ担保されてるんで、イカ

入れようがウインナー入れようが、たこ焼きでなくなるわけではないです」

栗栖 「え、またマウント？」

環 「普通に意味わかんないんで、服装だけで十分ですよ」

栗栖 「じゃあ言うけど、明石焼きはどうなわけ？ たこ焼き粉使うけど、明石焼きっていうよ。タコはどこいった？」

環 「あの、それ違いますから。明石焼きの影響受けてたこ焼きが生まれたんです。というか、もはやぼさの喻えじゃないし。探偵なのに論点ズレまくり」

栗栖 「なっ」

信号が青になる。車が動き出す。

栗栖 「とりあえず、一旦この話は停戦だな」

環 「もう論破してるんで」

8. 銀行・駐車場（夕）

車が到着する。

環と栗栖、降りる。

環 「運転ありがとうございました」

栗栖、大きく伸びをする。

環 「あの、訊いていいです？」

栗栖 「今度は何？」

環 「密室の謎、解けてますよね？」

栗栖 「はい？」

環 「ザ・探偵は勿体ぶるので。でも勿体ぶられるの迷惑なので、教えてもらえませんか？」

栗栖 「自分で考えることはないわけ？」

環 「わかる人に聞いた方がいいですし、事件はクイズじゃないんで。手っ取り早く」

栗栖、苦笑。

環 「それに、私が栗栖探偵の助手なんじゃなくて、栗栖探偵が私の助手なんです。そこ間違えないでください」

栗栖 「強烈新人現る……」

環 「とりあえず時間もないんで、一旦聞き込み行きましょう」と、すたすたと歩いていく。

栗栖、パイプを咥える。

環、振り返って、

環 「ほら早く、行きますよ」

栗栖、ペースを崩されたといった様子で、渋々ついていく。

（終わり）